



【図3】こどもたちと始める場づくり。石民家改修作業に没頭することどもたちの姿。写真上(右側)は大工の岩崎さん

そんなところへ行かなくていいというような家庭の子は来られません。この二つのハードルを越えられる子には今後いろんなチャンスがあるだろうと思っただけです。だけど、こういう場が本当に必要な子って、ほかにいるんじゃないかって働きながらずっと思っていました。

ここで6年働いたあとに、長崎に戻って地元私立高校で働き始めました。その学校は学力は県でも最下位のほうで、生徒たちは勉強で自信を無くし、認められずに自己肯定感が低く、しかも経済的に厳しい子たちもいました。そういう子たちは、よくこういうことを言うんです。「俺(お)なんて生きててもしょうがないし」って。僕はそれがすごくショックでした。その子たちにはその子たちの持ち味があるのに、成績やルールを守るということだけでしか評価されないのです。スポーツがすごくとか、歌がすごく上

手だったり、アニメに詳しくて全部暗記しているとか、校則破って居酒屋でバイトしているけど接客がとてもまいとか。僕は長崎に戻ってから、長野で働いていたときのようなく、それぞれ持ち味が生きる場はないのか、ずっと調べていました。だけど、なかなか見当たりませんでした。それで僕たち二人は決めたのです。そういう場所がないなら作るう。はじめは自分の心のモヤモヤに対して「こんな世の中は息苦しいよ」と表現をしていたことが、結果的に場づくりになっていたのだと思います。

こどもたちとはじめる場づくり ——築100年の空き家改修

場づくりは、こどもたちと仕事をするとことから始めました(図3)。家探しをしているとき、ジャングルのような庭に建つ築100年のボロ

き家改修からスタートしようと思ったのですが、当初は僕たちもこどもの知り合いが全然いなかったんで、自分たちでチラシをつくって、小学校の校門前で呼びかけるところから始めました。

工事は、岩崎さんという大工さんをお願いしました。大人が主導する工事はやりたくなかったんで、「釘抜き一本に、一時間でも二時間でもいいからこどものペースでやりたいんです」と言ったら、「いいですよ」と言ってくれたのが、岩崎さんでした。この方に出会わなければこの工事はできなかつたなと思います。

はじめに、こどもたちとちよつとだけルールを決めました。「やりたかつたらやろう、やりたくなかつたら遊んでも休んでもオッケーだよ」ということです。そして大人側は失敗を見守ること。失敗が重なつて、やつとできたということが喜びになるんだから、と。

こどもたちには、解体作業からプロの道具を使わせてもらいました。はじめはあれこれ言っていた子も、やりだしたらハマる子がいっぱい。それから、遊びもどんどん生まれました。たとえば、いろんな石を砕いて遊びだしたり。そこらに落ちてくるセメント片とか何かを集め出したり。それから、廃材運びも、普通だつたらバイトでもやりたくないという感じですけど、「これ面白い！」とついでトラックまで運んだりするわけです。全てが遊びで、何をやるにもこどもたちの顔は真剣です。これまで僕は用意されたプログラムに参加する子たちと関わっていたので、こどもは何もなくても遊ぶし、自由にやりたいことをととんやるんだなとすごく驚きました。大人が無駄だなとか、バカらしいと思うことを、心からやってみたくて実現していくというのは、まさにクリエイティブだなと思いました。

僕は、この工事はお家のハード面をつくるだけのものだと思っただけでしたが、振り返ってみると、これからの溜まり場の雰囲気をつくるというソフト面をつくっていたんだなと思います。3か月後に「かつちえて」をオープンしたときから、こどもたちは初日からゴロゴロして居心地良さそうにしているんです。「こは私がつくつたんだよ」と、友達を連れて来たりして、どんどん賑がっていきました。

こどもの関係を重視した運営のあり方

訪れるこどもたちがお客様ではなく、それぞれが主体になれるように、こどもからお金をもらわずに場を成り立たせて、自分たちの生活も成り立たせようと思いました。お金をもらおうとサービス提供者と受ける側というような関係性ができてしまうので、僕はそれはここではやりたくないと思っただけです。それに、お金のやりとりをすると来れない子も出てくるし、本来遊ぶにお金はかからないものです。

そこで考えたことは、お金をもらう対象をずらすということです。こどもたちではなく、こどもたちの周りや遠くからみている人たち、あるいは全国で様子をみている人たちを対象にして、さらに大人向けの事業や依頼されるお仕事を組み合わせながら成立させていきました。

具体的には、SNSでマメに発信して活動費の寄付を募つたり、アマゾンの「欲しいものリスト」を公開第三者による匿名の購入が可能してジネリスや日用品を物品支援していただいたりしています。また、集まったジネリスやビールは「カンパイでカンパ！」という募金制でドリンク提供し、飲めば飲むほど応援になるようにしました。こどもたちは近くのスーパーに行かなくても飲めるし、この様子を発信したら、寄付してくれた人が一緒に場をつくつていっているような感じになって喜んでくれるんです。それ以外にも、WEBストアでオリジナル手ぬぐいを売つたり、QR

コードを読み取つて500円募金できるような商品など、いろいろな関わり方を準備しました。

ここには指導員やボランティアはいません。いろんな世代がこちやませで、それぞれの得意技や違いがあつて面白いんです。こどもの方ができることもあるので、役割をあえて作りませんでした。たとえば、3歳の子を20歳の子が面倒みているような風景でも、実は3歳の子が20歳の子の持ち味を生かしていたりするんです。それから、妊婦さんと高校生が出会つたらいろんな話ができたり、中高生だけが集まると、中学生の悩みを高校生が聞いてくれたりするんです。

実は、住む家と拠点を分けようと思つて、1年半くらい休んで新たな空き家の改修に入り始めていました。これからととんやつていこう！と意気込んでいたところにコロナ禍になつてしまつたんです。集まりづらいこととすごく悩み、すごく落ち込みました。

でも、こどもたちが連絡をくれたり、一緒にやろうと遊びに来てくれたりするなかで、少しずつ工事も進めています。まだいろいろと悩んでいるところですが、よかつたらご支援いただけたらと思います。



【図4】「欲しいものリスト」を利用した物品支援